

## ● 制作

# 歩いて紡ぐ、時の記憶 —シークエンスの考察に基づく防災と循環が生む公園の提案

Weaving memories of time through walking

- A park proposal that creates disaster prevention and circulation based on a consideration of sequence-

高塚 啓輔 園芸学研究所 ランドスケープ学コース (主指導教員：章 俊華)  
TAKATSUKA Keisuke

## 1. 研究の背景と目的

本研究では、シークエンスという設計概念・設計手法を現代の都市空間に対してランドスケープデザインとして応用することを試みる。「シークエンス (Sequence)」を英和辞典で引くと「前に続いて後より来ること、または起こること」これらから、移動にともなう景色の変化、時間・空間・出来事の連続性を捉える概念であり、媒体でもありと考えられる。

材野博司 (2012) は、「移動という時間の経過とともに連続的に変化し展開してゆく空間やそこでの出来事の秩序であり、モビリティに支えられた現代都市空間に歴史的空間の豊かさを摺り合わせるには良き媒体になると考えている。」と述べている。そこで、このシークエンスの概念を用いる対象として、近代以前から現代に至るまで豊かな歴史を持つ城跡に着目した。対象地は、武蔵野台地の辺縁部に位置する東京都三鷹市の天神山遺跡と周辺の河川緑地空間である。城はこれまで、周囲を見渡すことのできる台地や高台に築かれ、安全性や防衛性などの観点から防衛拠点としてまちや人々を守る役割を担ってきた。歴史的にかたち作られてきた地形や堀、周囲を流れる河川のような環境を有し、台地部と低地部の狭間に位置していることから防災や循環としてのポテンシャルがあると考えられる。

現代都市において過去の豊かな歴史を織り込んでシークエンスによっていかに演出していくのかという「問い」に対して、研究から得られた仮説的な考察に基づいて、遺跡とその背後にある文脈を読み解くことで、台地部のまちから公園、河川まで一体的に開かれた新たな防災や循環の拠点として再位置付けることを試みる。そして過去の記憶とつながる公園を提案することを目的とする。

## 2. 研究の方法

以下に研究の方法と流れを示す。

### 調査・分析①：シークエンスに関する調査

対象地とその背後の文脈を読み解き、「まち—公園—河川」まで開かれたシークエンシヤルな空間構成を考えるにあたり、シークエンスの空間構成において代

表的な建築家・谷口吉生の美術館建築対象に分析を行う。

ここから共通項目に凡例を設定し、A~Kの場面の型として類型化を行い、考察する。

### 調査分析②：対象地に関する調査

設計対象地は東京都三鷹市に位置する天神山遺跡と周辺の河川緑地空間である。文献や現地調査から敷地に関する課題と位置づけ、地形的特徴や歴史的背景、周辺環境との関係性やしゅくみをまとめる。



図1：敷地の鳥観図と敷地内の様子

以上の調査・分析の結果から得られた知見を踏まえ、提案のコンセプトを立案し、設計提案を行う。

### 3. 調査分析①：シークエンスに関する調査

建築家・谷口吉生の作品に見られる外部空間を含めた空間のシークエンスに着目し、ランドスケープの視点から一連の流れを捉え、分析及び類型化を試みた。

#### 3-1. 分析対象の設定と位置づけ

シークエンスという設計概念をランドスケープデザインとして応用するための参照事例として、美術館建築の名手とされる建築家・谷口吉生の作品を分析対象に設定した。

さらに背後の文脈や周囲の環境との関係性をランドスケープの視点からシークエンスを用いて読み解くための分析軸として、「外部空間から1階レベルの空間構成及びそのシークエンス」と設定する。

- ① 自然環境や都市環境を背景とすること
- ② 建築が単体として完結せず外部空間（アプローチや前庭など）を通じて内部へと導かれるという特徴をもち、その過程が空間体験として設計されている美術館建築を共通項とする。このような観点から、東京国立博物館/法隆寺宝物館（HR）土門拳記念館（DK）、豊田市美術館（TT）、香川県立東山魁夷せとうち美術館（KK）、ニューヨーク近代美術館（MoMA）の5作品とした。（以下調査対象地区は括弧内の略称とする。例：HRは法隆寺宝物館）

### 3-2. 分析方法と類型化

対象とした複数の美術館建築について、外部から内部に至る一連の平面構成に着目し、来訪者の動線に沿って一連の流れを捉え、空間を「場面」として読み取り、抽出した（注1）。複数の共通してみられる場面構成（項目）をもとに、シーケンスを構成する凡例（類型）として設定した。図2より、単なる動線や展示機能にとどまらず、外部から内部へと連続する移動の中で水景施設や外部空間との演習などによって、来訪者へ空間体験を印象付けている。これは、移動や鑑賞行為そのものを拡張する役割を果たしているのではないかと考えられる。



図2：類型化の一覧

### 4. 調査分析②：対象地の歴史、課題と位置づけ等

図3のように設計対象地である天神山遺跡は、東京都三鷹市にかけて存在した城の跡地であり、市内では唯一遺構の残る城郭跡となっている。近く深大寺城跡がある為、そちらの支城であったと考えられる。現在、城址は「新川天神山青少年広場」として周囲から遺跡としても認識されづらい生い茂った樹林地のような公園となっており、北側にある土塁や空堀といった遺構を確認することができる。また、公園全体がただ広いことから人が寄り付きづらいことも「課題」として挙げられる。また、低地部では都市化により洪水リスク（風水害, 内水氾濫）があることが分かり、水害などの起こ

りやすい防災上の課題が挙げられる。蛇行する仙川に囲まれた半島状の地形を巧みに利用した単郭式構造の城である。陸続きとなる北側のみを堀切によって遮断し、土塁を設けることで防御性を高めていった。また、真横を流れる仙川は、天然の堀としての役割を果たしていた可能性が高く、対岸には「島屋敷」と呼ばれた地名が残されている。これらの点から、当時の地域の拠点性と防御や居住といった機能が河川を挟んで成立していた点が特徴であり、仙川は拠点を支える重要な要素としても位置づけられていたと考えられる。一方で、当時は湧水により支えられてきたが、都市化の影響により水を速やかに流下させるための構造物として側面を強めてきた。

制作に向けて、「地域の生命線（避難拠点）として機能するため、周囲からの視認性（樹木の伐採や間伐など）や経路（誘導性や安全性の向上）に向けた計画」や「コンクリートに頼るのではなく、一部を浸透させて周辺の雨を受け止める循環の仕組み（受け皿）をつくること、貯水や浸透の際に、年間と通じた四季の変化を取り込んだ空間構成」が重要であると考えた。

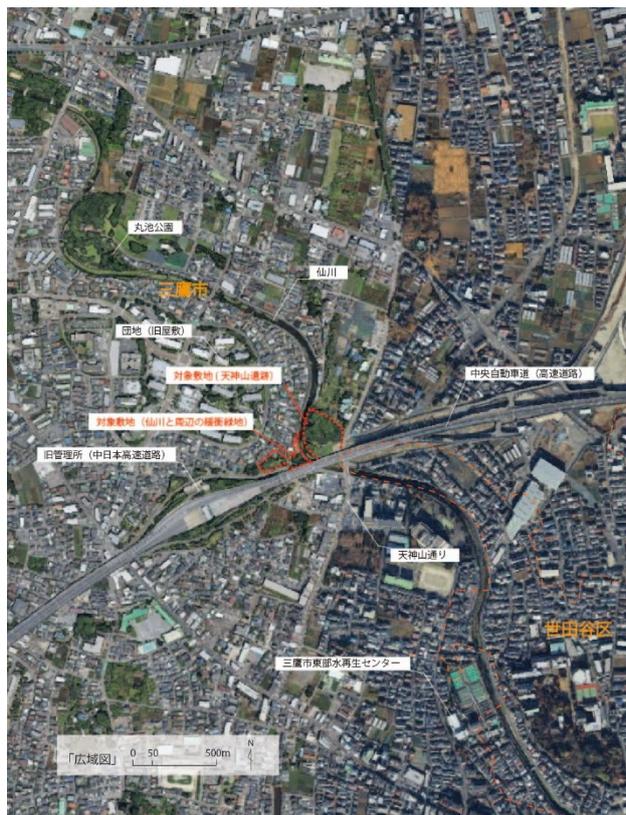


図3：広域図

### 脚注

注1) アプローチや展示室のような来訪者のための移動や滞在のための空間として位置付けられている空間を主に場面として定義する。

## 5. 設計提案『歩いて紡ぐ、時の記憶』

### 5-1. 設計のコンセプト

シークエンスの観点から武蔵野台地縁部に位置する城跡を再解釈し、防災や循環を担う現代風のまちの結節点として再構築する。歴史的な風土を背景に、季節の移ろいや水位の変化を取り込み、城跡やエッジの「痕跡」を用いて、記憶をつなぎ重ねた公園を提案する。

### 5-2. マスタープラン

残された痕跡である土塁や城郭（壁）を手がかりに、対象とした代表的な建築作品をランドスケープの視点から分析し、導き出された仮説的な考察と類型化の型を応用する。当時の記憶とその方向性を結び付けながら建築の再配置(00)・3つのレイヤー(01 緑・02 水・03 移動の流れ)を重ね合わせることで、時や空間という概念的に横断するシークエンスにより空間化する。城跡やエッジに刻まれた「記憶」を歩いて紡ぐ、シークエンスの空間体験へと展開する。

### 5-3. フェーズによって変化する空間構成とプログラム

・防災：低地部の洪水リスクが大きい地域などの防災上の起こりやすい災害に焦点を当てて、地理的特性を活かした仕組みや日常の備えなどをつくる。加えて間伐などにより日常的な視認性も高め、周辺のまちと繋がる動線（経路）や視認性や防災機能の向上を図る。

・循環：復元された低湿地と土塁により、雨水や周辺からの雨水を一時的に受け止め、水位や季節の移ろいを取り込み、緩やかに浸透や滞留させ、居場所にもなる。防災機能や日常的な人の活動と重なり合う仕組みを形成する。

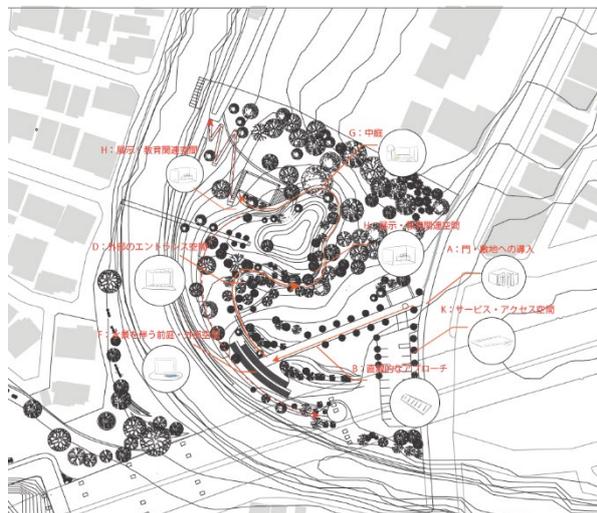


図4：天神山遺跡への類型化の応用と構成

### 6-1. 詳細設計 体験のシークエンス

01 敷地への入口：通りの街路から地域由来の植栽による緑の連続と石積みによる広い広場が行き交う人を誘引させる。(K：駐車場) (A：門・敷地への導入)

02 アースワークの間を抜けていく並木のプロムナード：土塁によって形成された島状の並木の間を抜け、徐々に水辺へ

の視界が開く。この起伏はまちの地脈ともつながる。(B:直線的なアプローチ)

03 仙川へ開かれた階段と広間：階段と広間によりかつて境界を作っていた河川との距離の変化や対岸への眺めの復活とともに人々の移動や活動を受け止める結節点となる。

(F：水景を伴う前庭と外部空間)

04 樹林への入口：木々による回廊であり、天井への高い吹き抜けのような印象を与え、上りはじめてどこか期待感を感じさせる。(D：外部のエントランス)

05 エッジに沿う散策路：城山のエッジに沿って続く散策路は、当時のかたちを縁取ったようになっている。地形を受け継ぎ、移動だけでなく滞留するための居場所を再発見する

(H：展示や教育関連空間) 06 主郭をモチーフにした中庭と

その回廊：山頂部であり中心的な役割を担っていたであろう主郭をモチーフに道により囲われた中庭と中心に回廊を形成する。高台のような台地部から河川や周辺のまちも見渡せて、訪れた人々はこれまでの変遷と今後のこの場所の役割を再認識するであろう (G：中庭)。

07 記念室テラス：当時の名残である急斜面の地形を活かし、地域由来の斜面林から水辺のエコトーンを望め、佇める個室のようなテラス空間。天然の堀の役割を果たしていた蛇行していた河川も、その開かれたような景観を見ることができる。この一連の移動に伴う体験により、城跡やエッジが持つ「記憶」とつながる特別な体験を与えられると考える。(H：展示や教育関連空間)

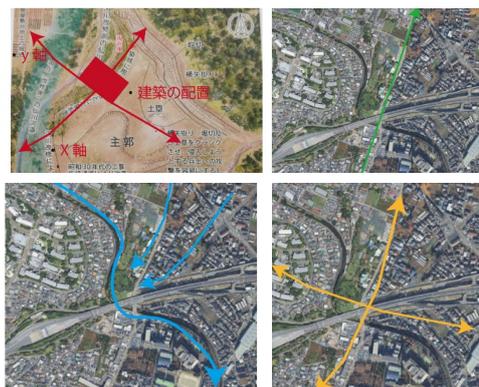


図5：マスタープランダイアグラム

地形や思想を受け継ぎながら、移動にともなう新たな行為や体験を誘発させる。台地部と低地部のまちをつなぎ結節点へ、歩行体験の中でまちの関係を積み重ねる時間へと変わっていく。



応用：一連の流れと3つのレイヤーを重ねる  
 00 蛇行していた川と地形から**建築の配置**



引用文献

- 1) 材野博司著『庭園から都市へ シークエンスの日本』
- 2) 建築家の谷口吉生の建築作品 11 選  
<https://designmagazine.jp/yoshio-taniguchi/#i-2>
- 3) 断面想起法による空間認知の分析ランドスケープアーキテクチャの断面構成に関する研究(その1) 積田用
- 4) 三鷹市環境基本計画 2027  
[https://www.city.mitaka.lg.jp/c\\_pubcome/112/attached/attach\\_112178\\_8.pdf](https://www.city.mitaka.lg.jp/c_pubcome/112/attached/attach_112178_8.pdf)
- 5) 三鷹市の浸水ハザードマップ  
[https://www.city.mitaka.lg.jp/c\\_service/034/034182.html](https://www.city.mitaka.lg.jp/c_service/034/034182.html)
- 6) 日本建築学会大会梗概集「近年の庁舎建築デザインの特徴と類型化」
- 7) 三鷹市の浸水ハザードマップ  
[https://www.city.mitaka.lg.jp/c\\_service/034/034182.html](https://www.city.mitaka.lg.jp/c_service/034/034182.html)
- 8) 三鷹市の防災マップ  
[https://www.city.mitaka.lg.jp/c\\_service/090/090459.html](https://www.city.mitaka.lg.jp/c_service/090/090459.html)

(主査 木下 剛, 副主査: 章 俊華, 霜田亮祐)